



2018.9.1. No.100

発行 日本養豚事業協同組合

〒104-0033 東京都中央区新川2-1-10

八重洲早川第2ビル6階

TEL.03-6262-8990 FAX.03-6262-8991

ゆめ通信100号記念 今後の豚事協の活動について

理事長 松村 昌雄
(有)松村牧場・埼玉県

日本養豚事業協同組合（以下、豚事協）は平成12年11月232名の同意の下に設立され、18年が経過しようとしております。当時の全国の養豚生産者は11,700名、母豚数は93万頭でした。中小の養豚農家をいかにして守るかを考え、誰でも大手並みの価格で生産資材を調達できるための「組合」を設立しようとの志澤勝氏、栗木鋭三氏、稲吉弘之氏の発案により、11名の発起人の方々によって豚事協は産声をあげました。そしてこの度「ゆめ通信」は発刊100号を迎えました。発刊100号を記念して、今号は弊組合の役員（理事、監事、支部長、女性部長）の寄稿文を掲載することと致しました。

豚事協の定款には、「本組合は、組合員の相互扶助の精神に基づき、組合員のために必要な共同事業を行い、もって組合員の自主的な経済活動を促進し、かつ、その経済的地位の向上を図ることを目的とする」と謳われています。組合員の皆様方においても世代交代が進んできておりますので、改めて組合の設立の過程や趣旨等をご理解いただきたいと思います。

2018年7月末現在の組合員数は430名となりました。設立当初の目標組合員数は500名だったそうですが、残念ながら未だ達成されておられません。この18年で養豚農家数は60%以上も減少し現在は4,470戸となり、廃業による退会者が出ることも避けられない状況で、今後更に70名の会員増を計るのは大変ではありますが、更なる組合の活性化のため目標達成に向けて努めて参りたいと思います。

この18年間成長を続けてきた豚事協であります、

今後を考えると決してバラ色ではありません。1991年に牛肉、オレンジの自由化政策（関税によって守られてきましたが）の扉が開かれました。豚肉も差額関税制度で守られてきたとはいうものの、大型脱法行為が摘発されるたびに生産者が低豚価に悩まされたことは記憶に残っており、その結果、養豚農家が4,470戸まで減少してしまったわけです。

11ヶ国によるTPP新協定はすでに国内手続きが済み、関連法案の手続きも終了しました。TPP11そして日欧EPAと大型協定が相次いで来春には発効する可能性がほぼ確実となり、時間の経過とともにほぼ外堀は埋められています。当面の輸入基準価格は守られたものの、10年後に従価税が完全に撤廃されて、現行482円の従量税が50円にまで下がるとなれば、複雑な差額関税制度を利用せずにkgあたり50円を支払って好みの部位を必要な分だけ輸入できる状況が予想でき、安価な部位が米国を除くほぼ世界中から多量に日本に入ってくるでしょう（現状輸出に余力のある国はTPP11ヶ国とEUでほぼ100%）。充実した安定政策事業は法制化され、少ない負担金で事業への参加はできますが、それまでに残された5年間で（従量税125円）どこまでコスト削減ができるのかの取り組みが手遅れになることは許されません。

またこれ以上の養豚農家戸数の減少は飼料の流通量の低下を招き、結果として飼料価格の値上げが避けられなくなることも予想されます。食肉センターやと畜場等の流通コストも頭数減となれば値上がりに繋がるでしょう。業界が存続するためには最低で

も4,470戸を維持する必要があると思います。

豚事協では若手経営者育成塾、JPPAでは養豚大学校と次世代を担う後継者づくりにも力を注いでおります。そしてチェックオフ制度を推進し、今後の飼料基金制度についても検討する必要性も十分あります。コスト削減への努力は業界が一丸となって進ま

なければなりません。今後のさらなる豚事協の発展は組合員の経営を支えることに繋がるということを信じ、活動を高めていく所存です。そのためにはより一層の共同購入事業の利用拡大が必須となります。全組合員の共同購入事業利用をお願いし、今後勝ち続ける経営を目指しましょう。

豚事協18周年

副理事長 栗木 鋭三
(有)ロッセ農場・愛知県)

豚事協創立から18周年そして、ゆめ通信100号を迎え、筆不精な私ですが、記憶をたどりながら、豚事協の創立からの思い出を記してみます。

創立の1年ほど前に、当時養豚経営者会議の会長であった志澤勝氏より「日本の養豚事業界は、規模の大小にかかわらず皆が力を合わせ力強い経営をして、皆が生き残ることが大事だと思う。生産資材の共同購入や、生産技術や経営全般の勉強などをする事業協同組合を創ったらどうだろう」との思いを聞かされました。私は兼ねてより自給率95～96%の業界状況の中で激烈な競争を国内でしている採卵養鶏経営と異なって、養豚は自給率50数パーセントで敵は外国なので、国内生産者は皆で力を合わせて、強力な経営力を持って、外敵と戦うことが肝要だと思っていましたので、すぐに賛意を示しました。

当時の私は、まだ50代前半。まだまだ血気盛んで事業欲も旺盛な時でした。養鶏業界でも自分の会社経営のことだけでなく、自分の業界が良くなければ自社の経営の発展もないとの信念から、二足の草鞋（わらじ）での特攻回転で両業界掛け持ちの毎日を送っていました。そのため、賛意は示しましたが、事業協同組合の設立に向けての作業・行動については、ほとんど志澤氏に頼るしかありませんでした。志澤氏には、持ち前の強い信念と行動力で懸命に各方面に働きかけていただきました。

農水省も組織改革の時で、畜産局から畜産部へ移行する頃でして、必ずしも養豚事業協同組合設立に

賛成してくれる人ばかりではありませんでした。しかしSPC（スワインプレゼントクラブ）の同志の活動や、養豚問題検討会での志澤氏など、養豚業界同志の活躍が認められたこともあり、元畜産部長の永村氏（当時は畜産局審議官）などが応援してくださり、また、事務局設置・開設については、中央畜産会の中瀬副会長、香川専務が協力してくださり、山中貞則会長の決断で中央畜産会の一角に事務所を開設できました。そして、止原氏（初代専務理事）が志澤氏といっしょに設立認可作業を進めました。

そんな折に志澤氏から「さて、理事長は誰がいいだろう」と話があり、私はとっさに「それは稲吉氏がいいと思う」と言って志澤氏の同意を得ました。稲吉氏にお願いしましたら、快くお引き受けいただきました。これには裏話もありまして、克仁（ご子息）さんの嫁を探してくれるのが条件だとことでしたので、志澤氏と2人で懸命に努力をしましたが、実らず仕舞いでした。（今では素晴らしい家庭を築いて、立派な後継者になっておられることを申し添えておきます。）

稲吉理事長には、就任前から設立認可にも助力いただきました。そして日本養豚事業協同組合設立総会で就任されて以来、15年という長きに渡り、今日の立派な組合に育てていただきました。我々も理事をはじめ組合員皆で組合活動に力を注いでまいりましたが、稲吉氏には類いまれな実行力、熱意、先見性など、リーダーとしての力量を十分に発揮してい

いただきました。そして、次の松村理事長にバトンタッチして、今は顧問理事として松村理事長を叱咤激励しながら任務を続けていただいていることにただただ感謝いたします。

18周年を迎えた現在、私が思うことは、志澤氏が理念に掲げた小規模であっても大規模であっても、皆で力を結集して協同の力で1人の脱落者も出さないで73%の自給率を目指そうという目標（養豚問題研究会で決定）には、現状はまだまだほど遠いということなのです。

事業協同組合の組合員は、養豚業界を良くする、

そして組合に結集して組合を良くする、そのことが、自分の経営も良くするとの信念を持って励むことが肝要だと思います。組合の経済活動を「いいとこ取り」だけしないで、組合員全員が共同購入事業に参加して、皆で知恵を出し合って、品質向上と価格低減を図ることで利用拡大を図り、結果的にご自身の経営に利益があるようになることを願っております。皆で力を合わせて48%の自給率を少なくとも50%以上に戻し、勢いをつけて73%を目指そうではありませんか！

ゆめ通信100号記念

副理事長 山本 孝徳
(有)アクティブピッグ・愛知県)

今年の総会で副理事長に就任させて戴きました。未熟者ではございますが、誠心誠意努めて参りますのでよろしくお願い致します。ゆめ通信が100号を迎えこれまでご寄稿下さいました多くの皆様に心より感謝申し上げます。

“ゆめ”と言えば私の娘の名前は実る夢と書いて実夢（みゆ）と言います。実は夢ではないですね。Dreams come true ですね。夢は叶うんだという意味を込めて名付けました。

経営の神様と言われる松下幸之助氏は著書の中で「志を立てよう。本気になって、真剣に志を立てよう。生命をかける思いで志を立てよう。志を立てれば、事はもはや半ばは達せられたと言ってよい。志を立てるのに老いも若きもない。そして志あるところ、老いも若きも道は必ずひらけるのである。志を立てよう。自分のためにも、他人のためにも、そしてお互いの国、日本のためにも」とおっしゃられています。このゆめ通信が文字通り皆様の所に夢を運び、目標を掲げる、強い志を立てる為の一助となり、日本養豚事業協同組合が夢を語り合い、目標や強い意志形成の場所になることを信じて止みません。

私は稲吉前理事長率いるやまびこ会の会員ですが、設立から21年目に突入し、まだまだ稲吉会長に頼らざるを得ない事は多岐に渡りますが、今年度はやる気に溢れた3名の後継者と経営再建を目指す若き経営者が加入してくれました。そして、生産性向上のためグループシステムに取り組む者、規模拡大を画策する者など、全国の先進的な農場には少々遅れを取った感はありませんが、やまびこ会も新しい時代に入っていくのかなとワクワクしています。何か事を成す時、悩んだ時、腹を割って素っ裸になって話ができる仲間がいることは大きな財産です、そして豚事協はやまびこ会の全国版であると思っています。今現在、若手経営者育成塾の2期生（最年長者）として参加していますが、新たな出会いもあり、若い塾生の方々から元気を頂きながら楽しく勉強しています。多くの後継者の皆様のご参加を期待します。

組合員数はまだまだ400戸余り、豚事協の更なる発展の為にも加入推進は必須です。夢は500戸ですかね！また、事業活動にも多くの組合員の参加が必要です。組合員の皆様のご理解とご協力を切にお願い致します。

ゆめ通信100号記念に想う

顧問理事 稲吉 弘之
(有)マルミファーム・愛知県

豚事協創立18年目に「ゆめ通信」100号の発刊が出来ることに深い感慨を覚える。

1999年（平成11年）戦後の農政を大転換する「農政改革大綱」が示され「食料安全保障の確立」と「農業の多面的機能の維持」を2大目標とした新たな政策が「農政改革プログラム」の基に推進された。そのなかで、食料は国民の安定的生活を守るために最も大切なものであり、一定の自給率維持は不可欠との考えで農政が方向づけされた。豚肉は国民に親しまれ、我が国にとってなくてはならない動物性蛋白源として定着していた。それにもかかわらず養豚農家戸数は、豚肉の輸入自由化前の1970年（昭和45年）には44万4500戸あったのが、昭和46年の自由化後は年々減少の一途をたどり1984年（昭和59年）に10万戸を切り2000年（平成12年）には1万700戸まで激減した。

個々の養豚生産者は、安全・安心で美味しい豚肉をより低コストで、国民の皆さまに供給すべく日夜努力していたが、生産資材の高止まり、慢性疾病の浸潤で苦戦を強いられていた。以前は、中小養豚家においては生産資材の仕入れ価格が高い代わりに、緻密な管理と疾病が少ない飼育環境のために成績がよかったが、大手養豚家においては生産資材が安い代わりに大規模が災いして疾病が多く、豚肉生産コスト面において大規模と中小規模のバランスがとれていた。

ところが、PRRSやサーコ等、慢性疾病の浸潤によって、オールイン・オールアウト等の衛生対策を実施しなければ成績を上げることができなくなってきた。この飼養方式は一定規模以上の大手でなければ豚舎建設コストが割高になる事から導入が難しかった。従って、この方式を積極的に導入した大手養豚家は、資材も安く成績も向上して生産コストも下がった。一方、中小養豚家はこうした対策が打てず、生産コストが上昇していき、両者の経営格差が年々拡大していった。

このままではさらに生産者が減少し輸入豚肉に席捲されてしまうとの危機感から、志澤・栗木氏等のお骨折りによって、中小も大手も共に手を携えて日

本の豚肉自給率を向上させるために、2000年（平成12年）11月「相互扶助」の基本精神のもと「団結の力」で養豚業界の発展に貢献しようとの考えで組合が発足し、早いもので18期を迎える事が出来た。

財政不如意もさることながら、社会的信用を得るために（公社）中央畜産会に間借りして発足するのが良いとの志澤さんの考えで、当時の中瀬信三副会長をお願いした処、山中会長の許可も取って頂き船出が出来た。

翌年には、すぐ近くの虎の門「第10森ビル」に移転して独り立ちを果たした。組合員500名を目標に全国232名の組合員（現在430名）、常勤職員2名、非常勤役員13名で発足したので、中々手がまわらず苦労した。私も北海道から沖縄まで説明に出向き、皆さんの意見を聞きながら事業の推進に努力してきたが限界があった。

限られた人間と時間の中で、全国組織の当組合が効率的に意思疎通を図るためには媒体が必要だろうとの結論に達し、機関紙として「ゆめ通信」を発刊する事にした。当初は編集を中村節子氏に頼み基礎をつくって戴き、その後は内部で編集をした。カラフルな紙面に加え、一方通行ではなく組合員の原稿掲載もあり、組合員相互の情報交換の場として一定の役割を果たしていると思う。編集に当たっている担当者の能力を私は高く評価している。

新年号には毎年理事長年頭所感として、その時々々の業界の話題、組合の年間方針等を記してきた。これを読むと業界の流れが良く理解でき、今でも参考になる事が多く時々読み返している。最新の技術的な知見、セミナーの講演内容の紹介、新商品の案内等々組合員の興味深い内容の伝達等充実してきていると思う。

現在は情報社会である。情報を制した者が勝者となる。今後は更に組合員の欲する情報を提供すると共に、組合員相互の情報交換の場として、更なる充実した誌面となるよう願っている。

仲間に支えられ養豚活性化に至る

顧問理事 志澤 勝
(有)ブライトピック・神奈川県

先日の総会でJPPA会長を無事に卒業することができました。皆さまのご協力のもと長年勤めさせていただきましたことに改めて感謝申し上げます。

平成11年に全豚会長を受け、次の年にかねてから念願であった日本養豚事業協同組合を設立することにより、農場規模に関係なく同一仕入値で資材を買い受けることが出来れば、今後国際化が進んでも皆で共に残れると思い、畜産局のあるうちに（12年度中に）認可を得るため、審議官の永村さんをお願いし局内をまとめていただきました。

一方、場所については全く予算もないので、日頃親しくさせていただいていた中央畜産会副会長の中瀬さんに一席を貸していただきたいとお願いしたところ、山中会長より直接説明を求められ、中瀬副会長に同伴いただき、「目的等とスタートは232名ですが、5年後10年後は1000名を目指し、日本の養豚振興に皆で努力します」と会長に説明し、即断をいただき発足が出来る運びとなりました。その時の1名の職員が初代の専務の止原さんでした。稲吉さんに理事長をお願いし、栗木さんと私で副理事長をさせていただきました。232名でスタートを切り、飼料を中心に関連商品の共同購入や重機まで扱ったことを懐かしく思い出します。

平成15年のメキシコFTAでは侍姿でカンクンに乗り込み、20万tのメキシコ特別枠を3.5万tで押え現在に至っています。平成18年には全豚を解散して全国の養豚組織を企業、中小養豚、系統、商系、種豚農家も一緒になって、日本の養豚の声が一つになるように一本化の養豚団体を作ろうと立ち上がりました。地ならしをして平成22年に現在のJPPAが発足。

この年、低豚価のため地域肉豚の積立割合を国と生産者の比率1：3から1：1へと要請し実現しました。この成果で難局を乗り越えた時でもありました。この時の総額は約200億円でした。平成25年には安倍内閣がTPP正式参加を表明し、いよいよ国際化が押し寄せて来ると思い、関税でせめられにくい重要品目に豚肉を入れるべく積極的に永田町に働きかけまし

た。今までにエコフィードの受皿作り及び飼料米の耕畜連携による受け入れ促進等により、国益に叶う産業としても理解され重要五品目と認定されました。

一方では養豚農業振興法制定の要請をお願いして、各党へ説明に出向きました。現議連会長の宮腰先生には各野党へ同席をお願いしていただき、必要性を訴え理解を求めました。その結果、平成26年に養豚農業振興法が公布されました。国会通過の本会議の傍聴の時は涙が出るほど嬉しかったです。この法案原文に力を注いでいただいた葉梨先生に改めて御礼を申し上げます。

平成25年よりTPP交渉会合10回のうち8回ステークホルダーとして参加、日本の立場を他国に説明しました。最終のアトランタで大筋合意がなされた直後から、“豚マルキンを生並みに”を強く打ち出し理解を求めました。各地での説明会に役員が出向き積極的に日本の養豚の立ち位置を主張し理解を求めました。平成27年の末に大望の牛マルキン、豚マルキンに対する養豚農業に関する法律に基本方針策定が明記されたことに、先生方をはじめ関係者の皆さまに感謝申し上げます。

これらの位置付けを受けて3年ほど前よりチェックオフ（トントン助成金）の法制化を言い続けてきました。日本養豚産業にこんな良いポジションを与えていただき、次は自分たちの産業は自分たちで今後活性化をしていくという思いと理念をしっかりと持ちたいと思います。

国産の豚肉の安心と安全、美味しさを国民にしっかりPRして食育を推進、少なくとも国内自給率50%以上に維持できるようにしたいと思います。皆で肉豚1頭50円を出し合って、今だけ、自分だけ良ければの考え方が進行しようとしている世の中で5年後、10年後もこの養豚産業を夢と希望の持てる業界にしていくことが我々の役目ではないでしょうか。

ぜひ、皆さまの結束と情熱を持って成し遂げましょう。よろしくお願い致します。

ゆめ通信100号記念に寄せて

専務理事 矢嶋 隆次

私は2011年4月に日本養豚事業協同組合にお世話になることになりましたから、7年半を超えたことになります。先代の齊藤専務が8年と言っていましたので、ほぼ同じ勤務年数になってしまいました。

日本農産工業株式会社（ノーサン）での最後の仕事は本社でした。本社の仕事は気楽なものだったので、豚自協への勤務を誘ってくれた当時の稲吉理事長に『勤まりますかね』と尋ねたところ『配合のことくらいわかるだろ』と言われ“そちらはわかります”と答えたものの不安でした。不安の原因は、ノーサンに在籍していたころは豚自協が営業の邪魔になり嫌いだっただからです。豚自協が邪魔だった理由は3ヶ月毎のゆめシリーズの工場渡し価格の発表です。建前は組合員にしか発表しないことになってはいても、価格が発表された翌日には私の手元にコピーが来ていたからです。私の手元にコピーが来るということは生産者も知っているということです。その度に顧客の養豚家から『おい！豚自協はいくらいくらだぞ』とやられます。今でもそうだと思いますが、価格改定幅が豚事協のそれは必ず、値上げ時は商系平均より小さく、値下げ時は大きくなっていましたからです。営業にとって対応が大変なのは『団体で飼料を購入するグループ』です。単一グループで数百トン／月の数量を纏められてもお付き合いが大変なのに、何千トンもの飼料を纏められると利益を確保するどころではないからです。確かに製造工場の回転は高まるので製造費用は安くなりますが、それ以上に価格の交渉でメーカー側に余裕がなくなるからです。大手の養豚家が黙って安い飼料を買えるのと同じ理屈です。

組合員の皆さんは、豚自協からくるFAXをちょいとメーカーに見せるだけでその恩恵に浴することができます。しかし飼料を購入してくれる組合員がいなければ価格の発表はできません。また前述したようにある程度大きな数量を背景に価格交渉しなければ飼料メーカーも本気で交渉してくれません。組合員の皆さんが1トンでも多くゆめシリーズを購入し

てくれることが交渉力の強化になります。

また、価格交渉を有利に進めるには、常に原料価格を調べ、それを使った交渉力がなければ飼料メーカーに太刀打ちできません。今の価格交渉メンバーは、横から見ていても上手だなと思います。私が豚自協に入った当初の価格交渉で、稲吉前理事長が私の入社前の立場を上手に利用して交渉したことがあります。当時、すでに退職した私の先輩から『余計なことをするな』と電話が入りましたから、よほどこたえたのだと思います。それくらいきつくて上手です。

今豚自協で感心していることがもう一つあります。支部セミナーです。私が飼料会社にいるころはセミナーの講師に有名な人ばかりを選び、高いお金を出して講演してもらっても生産者の参加はほとんどなく、来ていただいた生産者も大半は営業マンが一所懸命説得して飲み食い付きで来ていただいた人ばかりでした。それに比べると豚自協のセミナーは結構生産者が多いのに驚きます。しかも自費での参加です。講師が身近な人が多いのと、講演の内容が時宜を得ているからだと思います。飼料会社や医薬品メーカーの開催する、立派な学者を読んで飲食付きで開催するセミナーもいいのかもしれませんが、豚自協のセミナーは養豚に身近なセミナーであり、生産者が理解しやすい・理解しなければならない内容となっています。組合員の皆さんももう一度豚自協のセミナーを見つめなおしていただきたいものだと思います。

ゆめ通信に載せている記事も、技術的なものに関しては組合員の皆さんに身近な題材を選んで掲載するよう努力しています。内容も分かりやすく記述していただくよう著者をお願いしています。今後も生産者の発刊する雑誌であることを念頭に置いて著者をお願いしていきますのでご愛読をお願いいたします。また、掲載してほしい記事の希望がありましたら事務局までご連絡ください。事務局もネタが無くて困っています。

ゆめ通信100号記念に際して

理事 浅野 政輝
(有)浅野農場・北海道)

はじめに、今回の西日本を中心に北海道や中部地方において発生した豪雨による河川氾濫や土砂災害等で被災並びに被害を受けられた皆様に心からお見舞い申し上げますとともに、亡くなられた方々へ深く哀悼の意を表します。

この原稿を書いている当日も日本各地で40度を超える気温の中災害復旧されている方々や普段の営農をされている方々もどうかお身体にはくれぐれもご自愛いただきたいと思う次第です。私が住む北海道は大雨の影響もあり、北海道で一番大きな石狩川も旭川やその近隣の町でも今年も氾濫が発生し農業被害額も相当な金額と試算されております。また、今年の北海道の気候の特徴としては最近まで低温による作物の発育障害に付け加え日照不足、長雨による圃場管理すらできない状況が続いており、河川敷の牧草畑が20haも水没被害が出たという話も聞いてお

ります。今後益々この影響が出て来るものと想像され、こういう時こそ皆で手を携えて苦境を乗り越えて行くべきだと痛感いたします。

日本養豚事業協同組合も被災された方々や近くで困窮している方々へ手を差し伸べるために存在しているとも考えますし、是非とも会員の皆様におかれましては多くの情報を事務局へお寄せ頂きますようお願いいたします。日EUEPAやTPPなど私たち養豚産業にもひしひしと国際化の流れが突きつけられるこの状況も豚事協の合言葉である「良い豚、良い餌、良い管理」をモットーとし会員の皆様のニーズに応えるべく様々な活動をして参ります。お近くの非会員の皆様にも是非ともお声がけいただき更に豚事協の輪を広げていきましょう。

終わりにゆめ通信100号にあたり寄稿させていただける事に感謝申し上げます。

組織は力だ

理事 遠藤 啓介
(有)コマクサファーム・岩手県)

人は一人の力では何も出来ない。一人よりも二人、そして組織があって養豚業界は発展する。

時代の流れで全国養豚経営者会議（全豚）・一般社団法人日本養豚協会（JPPA）・日本養豚事業協同組合（豚事協）が出来た。志澤勝・JPPA元会長、栗木鋭三・豚事協副理事長、稲吉弘之・豚事協顧問、そして農水省の方々、トンセイレンの国会議員の先生方など諸先輩方の色々な努力があり、我々が将来に亘り安定した養豚経営ができるための環境作りとして飼料、豚価、資材、養豚価格安定対策等々様々な取り組みや活動をしてきた。その事により大きな養

豚家も小さな養豚家共々「安定して国産豚肉生産が出来る経営とは」という発想から、日本養豚事業協同組合が生まれ、全ての養豚家が誰でも参加でき、全ての養豚家は同じ価格で肉豚生産するための資材を購入できる組織を、初代稲吉理事長にはしっかり作っていただいた。役員全員感謝の思いでいることと思う。

二代目松村理事長には、組織をしっかりまとめて業界の更なる発展のため、自分のカラーを出しながら理事長職を頑張っていただきたいと思う。

ゆめ通信100号記念に際して

理事 竹延 哲治

(ファロスファーム(株)・大阪府)

日本養豚事業協同組合は発足から18年目を迎えています。そして組合員へ情報発信する“ゆめ通信”が100号を迎えました。継続は力です。このような良質の情報誌が末永く発行されるのを願ってやみません。

日本養豚事業協同組合は稲吉前理事長がよくおっしゃっている様に、中小の養豚経営者が大規模経営に負けないよう飼料を中心に資材を共同購入するために設立された組織です。中小規模の組合員はなかなか東京等で開かれるセミナー、会議に参加することは難しいと思われます。そういった組合員と組合執行部、事務局を橋渡しするのがこのゆめ通信です。

インターネット等の普及により我々の入手できる情報は格段に増大しています。ありとあらゆる情報

は氾濫しているといってもいいでしょう。そうした中でゆめ通信は「良い餌、良い豚、良い管理」をスローガンに厳選された情報満載の稀有な組合誌です。日々現場での労働に多くの時間を費やしている組合員にとっては間違いのない方向に導いてくれる道しるべです。

これからの厳しい競争の時代、勝ち残るためには自分にとって良い情報かどうかを見分ける力を養い、考え、判断し、実行する力も必要になってきます。

日本養豚事業協同組合は資材の共同購入事業に加え、新たに若手経営者育成塾を立ち上げました。まさにこう言った人材の育成を目的としています。日本養豚事業協同組合の更なる発展を願ってやみません。

ゆめ通信100号記念に際して

理事 後藤 祐三

((有)大野ファーム・大分県)

飼料品質研究会において、全国から選んだ若者6名と共に飼料の配合設計、アミノ酸の添加量、原料の勉強をしています。在来LW、WL等だけではなく、種豚Topigsをはじめ多産系母豚の普及が著しく、また“ゆめシリーズ”のユーザーは北海道から沖縄までいますが、その地方ごとの必要カロリー、アミノ酸の要求量、病気の浸潤度合など、様々な条件により異なるため、種豚や各地域の状況に合った飼料の配合設計を確立することが、この勉強会の目的です。

私はこれからの養豚経営は飼料を制したものが生き残る時代だと考えています。市場ニーズの高い肉は、正肉歩留まりが良く、無駄な脂肪の付着が少なく、程よくサシの入ったものです。このような肉を作るために必要なのは遺伝半分、餌が半分だと考えます。

より経済的に過不足の無い飼料の設計が自分たちの手で出来るようになれば、今以上に“ゆめシリーズ”を使う生産者が増え、価格競争力が高くなり、組合員の経営に寄与できるのではないかと考えています。そして何より自農場に合った飼料設計が自分で出来る醍醐味は何物にも代えがたいものです。

ゆめシリーズはとうもろこしと大豆粕を主原料に単純配合で始まりましたが、今はクランブル飼料の割合が供給量の半分以上を超えてきました。FCの改善を考えると加熱飼料の重要性はますます高まっていくものと考えます。今までの“ゆめシリーズ”のいいところを残して、養豚の未来を描ける新たな“ゆめシリーズ”を一緒に設計してみたい、勉強してみたい若者がいましたら、是非事務局にご連絡ください。

ゆめ通信創刊100号おめでとうございます

理事 田中 哲美
(有)たなか・熊本県

100回の長きにわたり刊行を続けてこられた事務局、歴代の役員の皆様にもまずお礼を申し上げます。忙しい仕事をこなしながら、2カ月に一度の発行にはたくさんのご苦勞があったことと思います。

この稿を書くにあたって過去のゆめ通信を読み返してみました。それらには時々の動向について5年10年前から話題に取り上げ、まさに今に通ずる言葉を分かりやすく示してありました。例えば「1母豚2,000キロの枝肉出荷を」を早くから提唱し、品種、栄養、管理について示し、会員の生産性向上を図ってきました。またチェックオフの導入など未来につながる政策の議論をリードし、業界の発展に寄与しているのだと思います。「経営にはデータ管理と、そ

れに基づく経営管理が重要だ」という言葉が何度も登場し、ベンチマークの必要性普及にも早くから着眼し、今では無くてはならないものになりました。会員農場の取材記事では仲間の生産の様子が垣間見え、興味や学びの意欲がわくことも多々あります。

世界が目まぐるしく動き、貿易の圧力も強まるでしょう。圧力に負けず発展して行くには生産者の能力の発揮、それを支える情報の提供と団結の先頭に立つ豚事協の元気だと思います。

これからも先進的な知見や有利な情報、また会員相互の理解が深まる記事を期待しています。“ゆめ”を乗せた便りを力強く発信していきましょう。これからもどうぞよろしくお願いいたします。

ゆめ通信100号記念号に寄せて

理事 我那覇 明
(有)我那覇畜産・沖縄県

豚事協のゆめ通信が多くの方々のご協力により100号を迎えられたことに心より感謝いたします。

これまで多くの養豚生産者は、飼料会社や資材会社と価格交渉しても「地理的にコストがかかり値下げできない」「大量の仕入れが可能なら下がる」など、個々では対応が困難な状況にあり、大きな成果が生まれませんでした。情報に惑わされた挙句、価格交渉が出来なかったこともあったと思います。

しかし豚事協が設立したことで、飼料代のほか、優良種豚やカテーテル、脱臭剤などの飼料以外の資材関係も共同購入でき、大幅なコストカットに繋がったと実感しております。

現在では沖縄本島内であれば配送先は問わず、飼料に関しては1tでも100tでも同一単価（配送料含

む）で、またカテーテルや精液ボトルに関しても同一料金で購入できるようになりました。これまで行ってきた価格交渉にかかる時間も不要となり、生産活動に専念できるメリットも感じています。全国の養豚生産者は、豚事協の取り組みの成果を評価していることだと思います。

今後は悪臭対策や汚水処理など環境に配慮した更なる取り組みが求められるほか、TPPやFTA、EPAなどで外国産の安い豚肉が大量に輸入され、より厳しい状況になると考えられますので、豚事協の役割が増々重要になってきます。

“後継者がゆめと希望が持てる養豚農業”を目指すため、関係者の皆様のご支援とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

ゆめ通信100号発刊おめでとうございます

監事 **越智 富義**
(有)カワタキ・愛媛県)

日本養豚事業協同組合の設立から18年が経ち、ゆめ通信も100号を迎えました。

7月6日から8日朝にかけて中国四国地方を中心に発生した未曾有の豪雨により、被害に遭われた方々にお見舞い申し上げます。愛媛県では1ヶ所しかない大洲市の食肉センターが冠水し、長期にわたって使用が不可能とのことで、県外に出荷するしかない牛豚農家は大変苦労しています。1日も早い復旧を願ってやみません。

また、畜産農家の減少により運送業者も減少しており日頃から運送にも困っておりますが、私達が今後畜産業を続けていくために必要なインフラを守るためにも、これ以上の畜産農家の廃業に歯止めをかけたいものです。

愛媛県には豚事協設立以前から組合があり、組合員7名でメーカーより直接飼料を購入していました

が、全国レベルでの共同購入と情報交換が出来るというメリットを感じ、四国から私も含め多数の方が豚事協設立と同時に入会しました。

豚事協で共同購入事業として配合飼料ゆめシリーズの製造・供給が始まると、いろいろと問題が出てきましたが、迅速な対応により改善していきました。また、四国はオガクズ豚舎が多いためクランブル飼料の生産要望がありましたので、理事会で協議し承認を受けて、全国の中でも一早く製造が始まりました。地域独自の良質飼料の製造ができる有利性がある組合だと思っています。

通常豚肉生産費の半分为飼料代です。地域で要望する飼料を理事会で協議し製造できる自由度がある豚事協は私たちの経営にとって間違いなく有利だと思います。日頃あまり組合を利用していない方は是非利用して、経営に役立てて欲しいと思います。

ゆめ通信100号おめでとうございます

監事 **丹尾 久剛**
(有)丹尾農場・秋田県)

ゆめ通信が、記念すべき100号を数えたことに、心よりお礼申し上げます。また、100号を迎えるにあたり、原稿校正された事務局の皆様本当にありがとうございます。日本養豚事業協同組合は、平成12年11月の設立以来17年の月日が過ぎ、養豚業界のプライスリーダーとして、我々生産者のコスト削減に大きく貢献をしております。

私が、豚事協で行われた事業の中で一番思い出に残っているものは、教育情報事業の中での青年部活動です。前理事長の稲吉弘之氏の思い入れのある事業で、挨拶のたびに「若手が元気な業界は明るい」とおっしゃっておられ、この青年部活動のおかげで全国の若

手生産者の交流が活発化し、優秀な若手の経営者が続々と誕生したと思います。前理事長の言葉のごとく、日本の養豚の青年部活動をけん引し続けたのも豚事協の功績が大きいと思っております。青年部活動はJPPAに引き継がれましたが、3年前より今度は養豚業界のリーダーを育成すべく若手経営者育成塾を開塾し、さらなる業界への貢献を目指しております。

今後諸外国との関係で、ますます厳しい状況になることと思いますが、ゆめ通信が200号、300号と続き、日本養豚事業協同組合が養豚業界を輝かしく照らし続ける希望の灯としてあり続けることを祈念いたしまして、私の寄稿といたします。

ゆめ通信100号発刊おめでとうございます

北海道支部長 中岡 亮太
(有)ビクトリーポーク・北海道

今年度も北海道支部セミナーには多くの会員の方々にご参加いただき誠にありがとうございました。ご参加いただいた方々には実りのある話を聞いていただけたことと思います。様々な角度から情報を収集し、自身の経営に役立てて行く事は、この情報化社会において必須事項となってきています。以前ある生産者の方に「情報はお金を出してでも買いに行かないといけない」と言われたことが頭に残っています。仕事の都合がつかずなかなか参加することができない方もいると思いますが、今後のためにもなるべく参加してほしいと思いますし、皆さんの必要としている情報をより多く発信して行く事が出来るように本部にも働きかけをしていきたいと考えておりますので、聞きたい事や気になる事等があった場

合はご連絡をいただければと思います。

現在、豚事協若手経営者育成塾に2期生として参加しております。各地の養豚家と2年間同じテーブルで話をしていくことができるので、問題の解決への多角的な情報が得られる事や、後継者としてどの様に代替わりしていくのかなど普段あまり話を聞くことができないカリキュラムの内容に感謝しています。とても勉強になるので、是非多くの仲間にも参加してほしいと考えています。

北海道養豚業界の今後を考えると屠畜場問題など問題は山積していますが、皆様の英知を結集し、業界全体を通して対応していくことができるように要望を出していきたいと考えております。今後とも宜しくお願い致します。

ゆめ通信100号記念に際して

東北支部長 木村 洋文
(株)木村牧場・青森県

ゆめ通信100号おめでとうございます。

振り返ってみると私も50歳になり、この業界には大学生のころから全豚会議にも参加させてもらっていました。そのころは創業者がみなさんお元気で非常に闊達な意見交換がなされ、創業者ならではの積極的な時代へのチャレンジなどを見させてもらいました。

その後日本養豚事業協同組合が発足し、JPPAも発足しました。豚事協の発足は飼料業界にとっては大変だったと思いますが、生産者にとっては助かりました。また今では生産者が自らの力で結集し学び行動する場所として機能しているようです。

事業としては、飼料販売、添加物、機材、種豚Topigsなどがあり勉強会や研修会も行われ順調に伸びてきているようです。

これからの日本の養豚は、国内的には人口減少による労働者不足、配送網の人手不足によるコストの増加、国外的にはたんぱく質の需要増加、海外の経済発展による相対的な日本の地位低下による飼料の値上がり、海外からの安い豚肉（円安になれば変わる）などがあり、経営者の手腕が試される時代になるでしょう。そのためにも豚事協のように主体的な行動をし続けることが大事だと思っています。

ゆめ通信100号発刊おめでとうございます

関東支部長 辻内 嘉明
(鎬木ピックファーム第一・千葉県)

私は、千葉県旭市で養豚経営を行っています。旭市と言うと東日本大震災で津波に襲われた地域と思われるかもしれませんが、幸いにも養豚家は皆、台地の上に農場を築いており直接の被害は少なかったようです。ただ、自分たちの力で防ぐことのできない原発の放射能の影響による風評被害というものを体験しました。

自分は父が始めた養豚経営を継いで40年間、規模拡大に努力を惜しまずやってまいりました。しかし昨今のEPA（経済連携協定）やTPP（環太平洋パートナーシップ協定）などの貿易協定問題には頭を痛めています。今後輸入豚肉による豚価の低迷時代がいよいよ差し迫った課題となりつつあります。さら

に、飼料原料はほぼ輸入に頼るものであり、国内のみならず海外の気候変動までも穀物などの生産を脅かす次第であります。このような中でいかに生産コストを下げるかを考え、安心・安全・おいしい国産豚肉を消費者の皆様にご供給していかなくてはなりません。そして豚の疾病や繁殖・飼料等の勉強・研究を行っていききたいと思います。

しかし、自分も62歳となり、家族や従業員の体力の衰えを感じる昨今、養豚の仲間たちは、どのように戦っているのでしょうか。この問題も自分にとって重要な課題であります。

最後に日本養豚事業協同組合の益々の発展と組合員のご健康をお祈り申し上げます。

ゆめ通信100号記念に寄せて

中部支部長 栗木 貢男
(有)ロッセ農場・愛知県)

ゆめ通信100号おめでとうございます。

あっという間の100号！もう100号！というのが実感です。私自身ゆめ通信が毎回届くのを楽しみにしていますし、組合員の皆さんも同様だと思います。デジタル化、インターネットの普及でデータでの通信が主流となった今、あえて冊子という形態にこだわっているのもくすぐられる部分です。

私は、中部支部長を仰せつかってはいますが、支部セミナーに出席できなかった組合員さんにセミナーの詳細をお伝えいただいているのは特に助かります。もちろんその他の情報もタイムリーに伝えてくださっている事は特筆に値すると思っています。

豚事協は、中小規模の組合員の皆さんも大規模生

産者同様、優良で安価な飼料や資材の購入が出来、そして組合員の生産性改善・利益向上に寄与するためにある組織です。豚事協設立時、ゆめ通信創刊時には無かった「高能力種豚」という単語が今では当たり前のように飛び交っていますが、稲吉前理事長とともに導入した劇的に革新的な生産性を上げるための最大の貢献者、高能力種豚「Topigs」による生産性改善も豚事協が果たした大きな役割の一つだと思っています。唯一の「生体」資材でもあります。

成功事例でも失敗事例でも良い、成績改善のための教育活動をもっともっと積極的にやって頂き、勝ち残れる生産者組合豚事協にさせていただきたく、この先永久にゆめ通信が続く事を祈念致します。

ゆめ通信100号記念おめでとうございます

中四国支部長 **長岡 広幸**
(株)長岡ピースファクトリー・愛媛県

日本養豚事業協同組合が発足し、恒久的な月日が流れ、レポートレコーダーのゆめ通信の発行が100号という大きな節目と共に歴史を築けたことは多くの関係者そして組合員の方々の組合に対する思いが積み重なったからこそ迎えられる礎と存じます。

日本養豚事業協同組合が発足する以前に、愛媛県においてJAや特約店を介さず飼料をメーカーから直接購入し手数料をコストカットする四国養豚生産組合という組織を何人かの有志で立ち上げておりました。当時はメーカーも特約店も当然の事ではあります。協力を体制を前端的（全面的）に謳っている訳もなく、与信限度の問題、価格決定基準等大きな課題が山積しておりました。一つ解決すれば新たに別の問題が噴出したり、約束事が履行されなかったりと

数人の組合員でさえ中々まとめることが出来なかった事を今も思い出します。まして全国の海千山千の組合員、跳梁跋扈の特約店、更には鵜の目鷹の目の飼料メーカーと丁々発止の交渉を重ね日本全国の組合員を束ねた日本養豚事業協同組合の創設運営メンバーの方々には本当に頭の下がる思いです。更にその運営を維持継続する事の難しさは誰もが感じている事だと思います。

時代の流れには誰もが翻弄され流されることがありますが、組合発足の初心に今一度振り返って、飛躍安定を経験した今、組合が更なる円熟期を迎えるため、従流志不変の気概で末席の組合員として今後も微力ながら活動していきたいと思っております。

ゆめ通信100号おめでとうございます

九州支部長 **実取 孝祐**
(有)実取農場・熊本県

九州支部で支部長をさせていただいております実取です。ゆめ通信が発行100号を迎えたこと、大変おめでとうございます。

豚事協が18期目、私が養豚を始めて20年目と私の養豚人生のほとんどは豚事協と一緒に歩んできたように思います。発足時から青年部活動が活発で当時私はまだ20代でしたが、第1回目の青年部活動として企画された福島県白河市の家畜改良センターでの2泊3日の缶詰（監禁？）合宿に参加したことが特に印象に残っています。その後も各支部を巡る青年部全国研修会やセミナーなど多くの青年部活動を通して、全国にはこんなに多くの同年代の生産者がいるのかと驚き、そして切磋琢磨できる多くの仲間が

全国に出来ました。その青年部も数年前に発展的解散を迎え、青年部活動の多くがJPPAに引き継がれました。しかしその豚事協青年部をさらに発展させた「若手経営者育成塾」が開設されて、より深い学びの場、仲間づくりの場になっているのではと思います。そんな多くの学びの場がある豚事協の活動ですが、残念ながらそのすべてに参加することはなかなか難しく、参加できなかったセミナーなどの情報をまとめてあるゆめ通信は多くの組合員にとってなくてはならない情報源なのではないかと思っています。

これからも200号300号と続き、組合員の大事な情報源になっていただきたいと思います。改めまして100号の発行おめでとうございます！

沖縄支部活動について

沖縄支部長 **金城 栄**
(株)おいしいばるファーム・沖縄県)

ゆめ通信記念すべき100号の発行にあたり、沖縄支部の現状や課題等についてお話ししたいと思います。

現在、会員数は27名で、経営形態は一貫、繁殖、肥育と様々です。豚事協の利用状況としては、主に飼料「ゆめシリーズ」の購入が中心で、その他プレミックス、AI関連資材等があります。

支部の活動としては、毎月20日に定例会を開催し、会員相互の親睦を図りながら勉強会を催したりしています。それぞれの経営で問題になっていることについて議論したりすると、数時間の会も毎回あっという間に終わってしまうという状況です。

課題としては、種々の疾病等の問題もありますが、何と言っても種豚の調達が一番の課題ではないかと思っています。県内で飼育されている種豚では、高能力種豚といわれている種豚とは能力がかなりかけ離れている感があり、生産性等に大きな差を感じています。それをどう解決していくべきか、いつも議論になるところです。

これから、さらに厳しい時代を迎え、この養豚業界でどう生き抜いていくか、豚事協の活動にも大いに期待しながら、沖縄支部会員一同、自分のできることから更なる努力をしていきたいと思っています。

ゆめ通信100号記念

女性部部长 **川上 志江**
(株)あずみ野エコファーム・長野県)

平成21年7月31日、記念すべき女性部第一回セミナーが開催されました。稲吉前理事長の熱い思いで発足し、今年でプレ10周年になります。普段農場において大きな役割を担っている奥さまをはじめ女性スタッフに表に出る機会を作り、女性の活動を活性化させ、女性の目線で必要な議題を取り上げセミナーや研修会を行ってきました。

年に一度のセミナー構成は；その①講演会。元農水省の原田部長には公務でお忙しい中何度もその時々の畜産の現状や問題点を解り易く講演して頂き、本当に勉強になりました。稲吉昌子さん（有）マルミファーム）や嘉数美代子さん（嘉数ファーム）の講演は、長年にわたりバックアップされてきた女性の素晴らしさ満載で皆が感動しました。構成その②養豚関連施設視察。平成29年度より隔年で夏休みに地方開催にして、御家族・御夫婦での参加を勧めており、

小さいお子さん連れでも気軽に参加出来るよう工夫しています。これまでの視察実績として「伊賀の里モクモク手づくりファーム（三重県）」や「スマイルポーク（有）浅野農場直売所・北海道）」があります。その③料理教室。会員の豚肉を使用した和洋中のレシピです。講師は「ケンタロウさん」の様な有名な旬の料理人をお招きし、調理を楽しんでいます。その何点かのレシピはゆめ通信にも掲載されております。その④懇親会。年に一度お会いする方も多いのでとても盛り上がります。

女性の活動には経営者のバックアップが必要です。男性女性それぞれの立場のバックアップ体制を築きながら、養豚に携わる者としての喜びや充実感を味わっていければ嬉しい限りです。ゆめ通信と共に女性部も歩んでいきますので、是非多くの組合員の方々のセミナー参加をお待ちしております。

目指せ200号！

初代専務理事 止原 成郎

「ゆめ通信」が100号の大台に突入！創刊号から約5年間発行に携わった者として、発行の継続に努力されてきた歴代の事務局に敬意を表します。

「ゆめ通信」は、豚事協と組合員との意思疎通を効率的に図る手段として、平成13年8月の理事会にて発行することが決定されました。そして2ヶ月後の10月末には創刊号が発行されるのですが、当時の事務局の体制は私一人で、日常の事務処理、組合員への対応で手いっぱいなこと、機関誌の編集といった特殊な能力もないことから、自然の流れで外注することになりました。「困った時の中村さん」とばかりに(有)ベネットの中村節子さんに相談、すべてお願いすることにしました。

当時のPCのOSはWindows98、使用したソフトは「パブリッシャー」。今では博物館級となった3.5インチフロッピーディスクでやり取りしたことが懐かしく思い出されます。創刊以降しばらくは、豚事協でプリントアウトした原稿を簡易印刷したためモノクロでの発行でした。カラー版となったのは、事務所にカラーコピー機が導入された平成17年5月発行の22号からです。

ここで「ゆめ通信」の掲載内容を見てみましょう。創刊号では、巻頭に稲吉理事長（当時）の「豚事協の半年の活動から感じたこと」、次いで、栗木允男さん（ロッセファーム）（現：(有)ロッセ農場）の“ゆめミルクについて”、また、「獣医さんのワンポイントアドバイス」などが掲載されています。なかでも、栗木さんの寄稿は、豚事協の最初の事業として3月から始まった“ゆめミルク”を、いち早く採用された経緯と、給与結果に満足していることなどを隠すことなく克明に開示されています。さらに、留意事項や使い方のポイントまでと、始まったばかりの豚事協のメイン事業：「ゆめミルク」推進の力強い援護射撃となっていました。

機関誌定番の組合員農場訪問は3号から始まっています。訪問農場の選定は「ゆめシリーズ」を採用している農場を最優先し「ゆめシリーズ」拡販に一役買ってもらいました。記念すべき最初の農場は母

豚2030頭（当時）飼育の(有)山形ピッグファームさんで、地域と密着する経営の理念や「ゆめシリーズ」の採用で年間7～8百万円のコストダウンにつながったことなどが取材されています。

「ゆめ通信」は時代の変化とともに掲載される内容も変化して当然です。創刊から17年経った今、組合員の多くは世代交代が進んでいるでしょう。若い組合員の皆さん！東京に来た際には時間を作って本部をぜひ訪ねてください。そして99号までの「ゆめ通信」のバックナンバーを閲覧してはいかがでしょうか。「時代遅れの情報は不要！」と思われるかも知れませんが、時代が変わっても不変の農場運営のヒントになるものを一つ二つ見つけられると思います。

事務局時代の私には「ゆめ通信」に関して一つのこだわりを持っていました。それは、出来上がった「ゆめ通信」を役所など関係機関に郵送ではなく直接自分で届けることでした。手渡す時に担当者等と交わす二言三言が豚事協の存在をアピールできたからです。

おわりに、「ゆめ通信」が豚事協と組合員との意見交換の場としてますます活用されることを、そして200号発行を目指されることを、一OBとして願っております。



中国でアフリカ豚コレラ発生！

今年8月に中国で初めてアフリカ豚コレラが確認されました。

アフリカ豚コレラはワクチンなどの有効な治療方法はありません。日本への侵入阻止については、観光客などへの対策は国に依存せざるを得ませんが、アフリカ豚コレラ発生地域の畜舎や食肉処理場の近

くには立ち入らないこと、発生地域から帰国した時はダウンタイムをしっかりとるなど、自分たちでできる防疫対策はみんなで協力して実践しましょう。

詳しくは農林水産省のホームページをご覧ください。
<http://www.maff.go.jp/j/syouan/douei/asf.html>

アフリカ豚コレラの症状

病状は多岐に渡り、甚急性、急性、亜急性、慢性の症状を示す。甚急性では突然死亡、急性では発熱（40～42℃）、食欲不振、粘血便、チアノーゼ等を呈し、死亡率は100%に近い。



写真出典：USDA APHIS Plum Island Animal Disease Center

豚事協の年間行事

理 事 会

第 1 回	平成30年 1月19日 (金) (東京)
第 2 回	平成30年 2月16日 (金) (東京)
第 3 回	平成30年 4月20日 (金) (東京)
第 4 回	平成30年 7月20日 (金) (東京)
第 5 回	平成30年10月19日 (金) (東京)

支 部 会

中 部 支 部	平成30年 5月18日 (金) (名古屋)
関 東 支 部	平成30年 6月15日 (金) (東京)
北 海 道 支 部	平成30年 7月6日 (金) (札幌)
東 北 支 部	平成30年 8月24日 (金) (仙台)
中 四 国 支 部	平成30年 9月21日 (金) (松山)
九 州 支 部	平成30年11月2日 (金) (熊本)
沖 縄 支 部	平成30年11月22日 (金) (那覇)

女 性 部

第11回女性部セミナー	平成30年 7月2日 (月)～3日 (火) (東京)
-------------	----------------------------

そ の 他

海外視察研修	平成30年11月10日 (土)～17日 (土) (オランダ・ドイツ)
--------	------------------------------------

※青字は平成30年9月1日以降の行事となります。都合によっては変更・中止となる可能性もありますこと、ご了承下さい。

編 集 後 記

豚事協設立から18年が経過し、この度ゆめ通信が創刊から100号を迎えました。これもひとえに組合員、賛助会員はじめ今まで記事掲載にご協力いただいた全ての方々のご協力があったからこそ心より感謝申し上げます。

100号を記念して、今号は理事、監事、各支部長、女性部長よりの寄稿文を掲載することといたしました。お忙しい中ご協力いただきご寄稿いただいた役員の方々にはこの場を借りて改めて御礼申し上げます。本当にありがとうございました。それぞれの立場から思いの詰まった文章を送っていただき、ときには事務局に対してのお褒めの言葉や励ましの言葉もいただき、感謝すると同時に身の引き締まる思いもしています。これからもゆめ通信を途切れさせることがないように努力してまいりますので、引き続きご協力いただきたくお願い申し上げます。

ゆめ通信は各月の発行となっており、豚事協主催のセミナーなどの開催報告はもちろんのこと、技術情報、その時々旬の話題、周知事項など、みなさんの経営に役立てていただけるよう養豚に関する様々な情報を掲載していきたいと考えています。是非農場内で回覧し、情報を共有していただけると嬉しいと思います。また掲載して欲しい話題などございましたら、遠慮なく事務局にご連絡いただければと思います。日頃は一方的に送付しているだけですので、読んだ感想なども率直にお聞かせいただけると励みにもなります。今後ともどうぞよろしくお願い致します。(東)